

原告団

遺族・CO裁
判、災害責任
追及、特集号
第二百二十三号

原告団レポート

遺族——
岩中英子さん

二十日生まれ、六十歳）が、お茶を入れながら静かに語る。

「万田の田舎にお客があるでしょ。あのすべそばで、お父さんは生まれてます。大正八年三月二十日です。私も黒橋を渡った所でした。」

茂さんの父親は八百屋をしていました。英子さんの父親は万田鉦で定年退職まで働いた。

「今、生きていれば九十歳ぐらいです。昔は年金がありませんでしたから、あとは退職金での生活でした。」

地の者同志

「うちのお父さんも私も荒尾の万田出身なんです。」
岩中英子さん（大正十二年三月

「戦争がはじまりまして召集がきました。中国大陸へ行って、そこで終戦をむかえたのです。荒尾に帰ってきて、すぐに万田鉦に入りました。」

差別に抗す

「三池闘争中の記憶といっても特別にないですね。ピケに出るとき、バイクのうしろに乗せてもらってたぐらいです。」

三川鉦で採炭工として一緒に働いていた、吉井正雄さん（大正



昭和32年7月、合化労連水俣闘争で。後列向って左側、なぜか1人鉄帽でないのが岩中さん。



昭和37年ごろ、友人たちとの旅行先でくつろいだ岩中さん。

二十年前、身がすくんだ体育館

社宅のそばで終生闘う

生あるうちに責任を明らかに

「当日、私は岩中さんと一緒に、三川鉦の掘進でした。だから、よくわからないんです。四、五日前は普通に仕事をしていたんですが、まさか、炭じん爆発などとは思っていませんでした。」

岩中英子さんがつけていた出勤簿が残っている。月日、配役場所、作業内容、共同作業者名が横一行で埋められていた。泣き声、怒声、線香の煙、散らばる靴、下駄など、この世のことは思えず身がすくんでしまった。

夕方になって、宮浦鉦から昇坑してきたの知らせを受けた。変り果てた夫の棺とともに家に帰ってきたのは真夜中だった。前日の出勤簿や仲間の話をおぼろげに、三百五十メートル坑道、二十五昇部内右二片上段に横たわっていたばかりのころではなかったか。

「一日の仕事量は決まっております。十五日間、アソニットで仕事をしましたけど、なんか病気がせず、わすれた。遺族で体の弱い人は、他の職場へ移った。英子さんは人

に書いてある。十一月七日で終ったノートを開くと、採炭工としての本来の仕事をしたのは、十月中に三日間しかない。差別配役が、いかにひどかったかが行間ににじみ出ている。

宮浦鉦昇坑

「八日は休みだったので、今日出ると明日は休み（九日は土曜日）だった。だからといって、元気に二番方に出勤したのです。」

第一報はテレビで知った。「最初は坑外の施設が爆発したといっていました。ニュースを見ていますと、だんだん不安がつのりまして、近くの魚屋さんの車に乗せてもらい、組合の三川支部まで行きました。」



自宅の仏壇の前で、孫の浩子さん（小4）
徹くん（小2）といっしょに。

早い結審を

長男の伸司さんは三池工高を卒業すると、国鉄荒尾駅で働く労働者となった。

すでに小学生になった孫たちに囲まれ、英子さんは静かな日々を送る。

「組合の仕事ばかりして、いつも帰りが遅いんですよ」と、息子

の成長ぶりに目を細める。「二男が東京に、三男が長崎にいます。」

英子さんにとって、これが気がかりである。

「アソニットをやめて四年近くになりますが、爆発から二十年、みんな歳をとりました。」

このころは裁判傍聴に参加するたびに、そのことを強く感じるといふ。

「みんなが生きているうちに、結審をむかえ、会社の責任をせがひでも明らかにしてもらいたいと思います。」

すでに辺りは暗くなっていた。終生の地として緑が丘社宅のそばにいて、仲間たちとともにたたかう決意を語る英子さん。

それは茂さんの遺志でもある。十一月九日、大牟田市市民会館で三池大災害二十周年、裁判提訴十周年の抗議集会が開かれた。白い原告団のタスキをかけて、英子さんも参加した。

確かに過ぎ去った年月は長い。大災害の痛みと怒りをかかえた仲間たちも、英子さんと同じ思いで裁判勝利の日を待っているにちがいない。

「まだ、働けたのですけどね。十五日間、アソニットで仕事をしましたけど、なんか病気がせず、わすれた。遺族で体の弱い人は、他の職場へ移った。英子さんは人

に書いてある。十一月七日で終ったノートを開くと、採炭工としての本来の仕事をしたのは、十月中に三日間しかない。差別配役が、いかにひどかったかが行間ににじみ出ている。

「一日の仕事量は決まっております。十五日間、アソニットで仕事をしましたけど、なんか病気がせず、わすれた。遺族で体の弱い人は、他の職場へ移った。英子さんは人

に書いてある。十一月七日で終ったノートを開くと、採炭工としての本来の仕事をしたのは、十月中に三日間しかない。差別配役が、いかにひどかったかが行間ににじみ出ている。

「一日の仕事量は決まっております。十五日間、アソニットで仕事をしましたけど、なんか病気がせず、わすれた。遺族で体の弱い人は、他の職場へ移った。英子さんは人

負けん気で

遺族の生活対策として縫製工場とアソニット工場が誘致された。英子さんは荒尾市妙見にできたアソニット工場で働くことにした。

日給三百二十円だった。当初は仕事の内容にかかわらず支給されていたが、のちに単価制が導入された。

「まだ、働けたのですけどね。十五日間、アソニットで仕事をしましたけど、なんか病気がせず、わすれた。遺族で体の弱い人は、他の職場へ移った。英子さんは人

に書いてある。十一月七日で終ったノートを開くと、採炭工としての本来の仕事をしたのは、十月中に三日間しかない。差別配役が、いかにひどかったかが行間ににじみ出ている。